十二源氏袖鏡　十

特別
へ12
5091
10

源氏袖鏡第十

廿一 かしは木
廿二 よこぶえ
并 すゞむし
廿三 ゆふぎり
廿四 みのり
廿五 まぼろし
廿七 にほふひやうぶきやう

ヘ12
5091
10
<2001-076>

並 かうばい

并 たけかは

源氏

次一 柏木

源氏の君かさりふたわて二条の奥へ参給

今はとてもしんきかりもむそかれたしぬ

こひ乃たえやのこらん二条の文

ちうひくきしや立れよしうきことを思ひ

みさるすくありつくは文柴の君

柏木の宮のまわりとたわぬまも枝よ

あさりとふちいたまれし正月廿日は二条宮

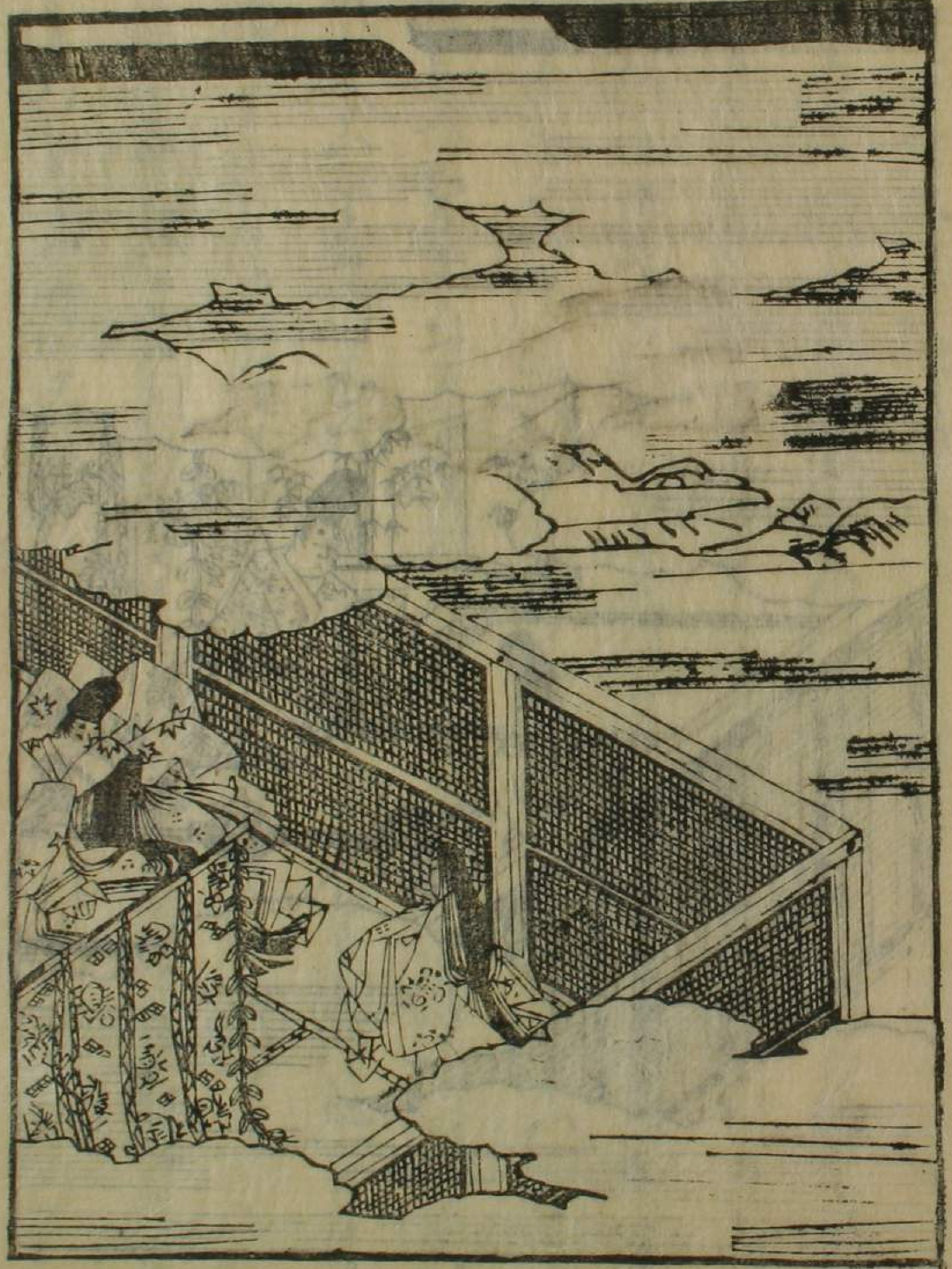
かくやとうら様りそのくちは也ちよつ

ひ給く山のみちに給ふか給へてようろくれ
て出させ給ふつゐくにまうしけ給て二条院
あさにたまふ給ぬ法門聲ハ乃やうの事をきく
ふいよくたしいろ思ひしてもきよたのこたく
まり給へる大やけより御まゐせ給て權大納言
にあり給をとくくれなふちくわたく母の
ことおもりしなきくかの御ち条の院もみ
しくおほしいかゝり二条の院あまにかまり
給ふ道は入道の宮ときこえけふ君さく
ひあくうけてうまれさ人まことは御門の御なる

是を源氏の御心にもまかれ給て入道の
宮へ源氏
た毎よりをはまかせ給しと人まていふくいとね
のれハこゝろん法門聲とさりの時夕さりのた
ねおいまるきゆいこんしまわ一条の御ちみ
まことゆんでなけくうしなひ中てたひあへ呪
いさいをうさされ給はいともとゑつるに一条乃
ことやへきか給へり法門聲の御てなし給ひ
様のさうたなるをこのはあわれなれて大将
こ給しあまいかかりぬ冬よにあひなりる

えんれいやよのさくらもあいらんとは門前
まことに花のさかりはありなるとあいらんとは
いのちなりけり柳桜ちらす家の前なれ共一條
のうやまと示
けふは柳のめふそむいめくさえたち花
丸ゆくおしみ○おけるのかりとある方たち
とてもよく小春の御の丈夫よの人もの振ハ流
らもともさけてありやのきりよみもやつまづ
つはふは妻女よみもありおちてむいめく
の方を見給ておちく

末のしるしとてはめでてさけるふうをとを
みの衣きらまじる夕霧大将
たま人もおそきつらんうちすてゝゆく
の居君こそあれとは弁の君
うしめしやうすこの衣あれきようとまじよら
さればよ花のちりぎんやよひのそおもふ大将一条
の前へまいりあかしかりそ来かかりてのたまふ
あらありあひれハ夕霧の大将
ようりハなましのやとふかしきまんえめつ
の御れゆかりありきとれせそれこゝつらふ女



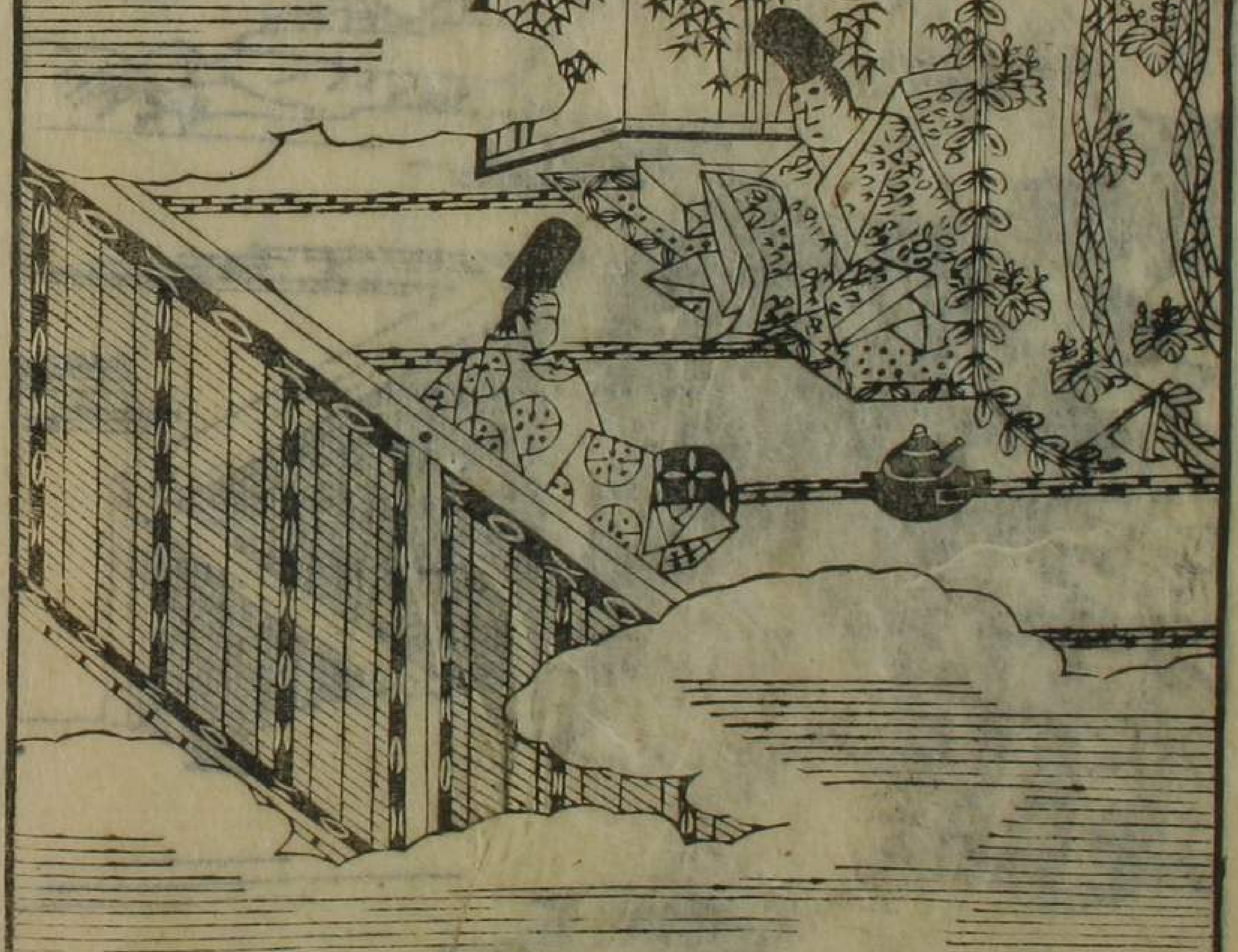
房ゆしかね君

かりそめ小萩かもとの袖ハまきすきも人に
しらせへぬ宿の本すゑり竹寺ゆへまなか
たまとかふ

廿二 横笛

山乃御門ハ二品の宮の御さまかへさせ給て後
ハかなきことにつけてもつねに御文あまた度
えひに御寺のかたはらのはやしにぬき出る
たかうなそのわたり乃山にほれるところなと
ふつきくをくられけれハ入道の宮へ奉り給ふ
御文に春の山ハ霞もたと〳〵しけれと心さし
ふかくほりいたさせて侍るしるしハかりになん

世をわかれ入りなん道ハをくるともおなし
ところを君もたつねよ 御返し二品の宮



うき世にあかぬところのゆかしくてこもりく
山ちかき所にこそはつかにはあまたひのあや
一かたは紫式部君めのとのもとよりかたひそ
てたまふれらひにまゐりもきてをたちまち
てとりかへしくはへるかり紫式部にて物語ける
そこのうれとて源氏
うち紫式部もはやれすまうられ竹のこはを
てうてき物そそなけるかへのこまんれうちもの
ぬそのものいそすくひさやられく此月はあり
はふりとまめくそひやうに料をたりてつかう

まんやうたりかしらへつゆ草してとさしに文
こまかに心ちしてまかんとちうきやうたう
うちかれはせ人のそくきの宮ゐちきりと
紫式部ゆうされたり桃つうこ大将一条の后より
まうて紫式部みとのもふまこんちやうのこと
こわちらしうり琵琶(びは)して大納言(さうなまん)越
ひまき紹清の卿れこのとすりし麿(たり)るなまこ
こふのこり文ひさうし紹ひし節もありこの
笛をこやま大納言まいりを紹つをきそこ
かさなし紹人は文をまる

露けさもむかしのやとよりふかしへ此秋より
かはらぬむしのねにかなしかりし大将
よこ笛のしらべいとになくおもしろく
たまはし給はりつきせす此うちの琴を名残なく
ゆかりあるらんを琴ち業の声さやうのことまてを
うしかきあはせまへて心とまりて大将
ことにおもくいひたるをいふは悔さらん人なら
ろきしはとうろ藤葉の声
ゆゑき夜のあはれさかりいまさしけとことら
かうふえやいらむいきる大将は此笛を吹なして

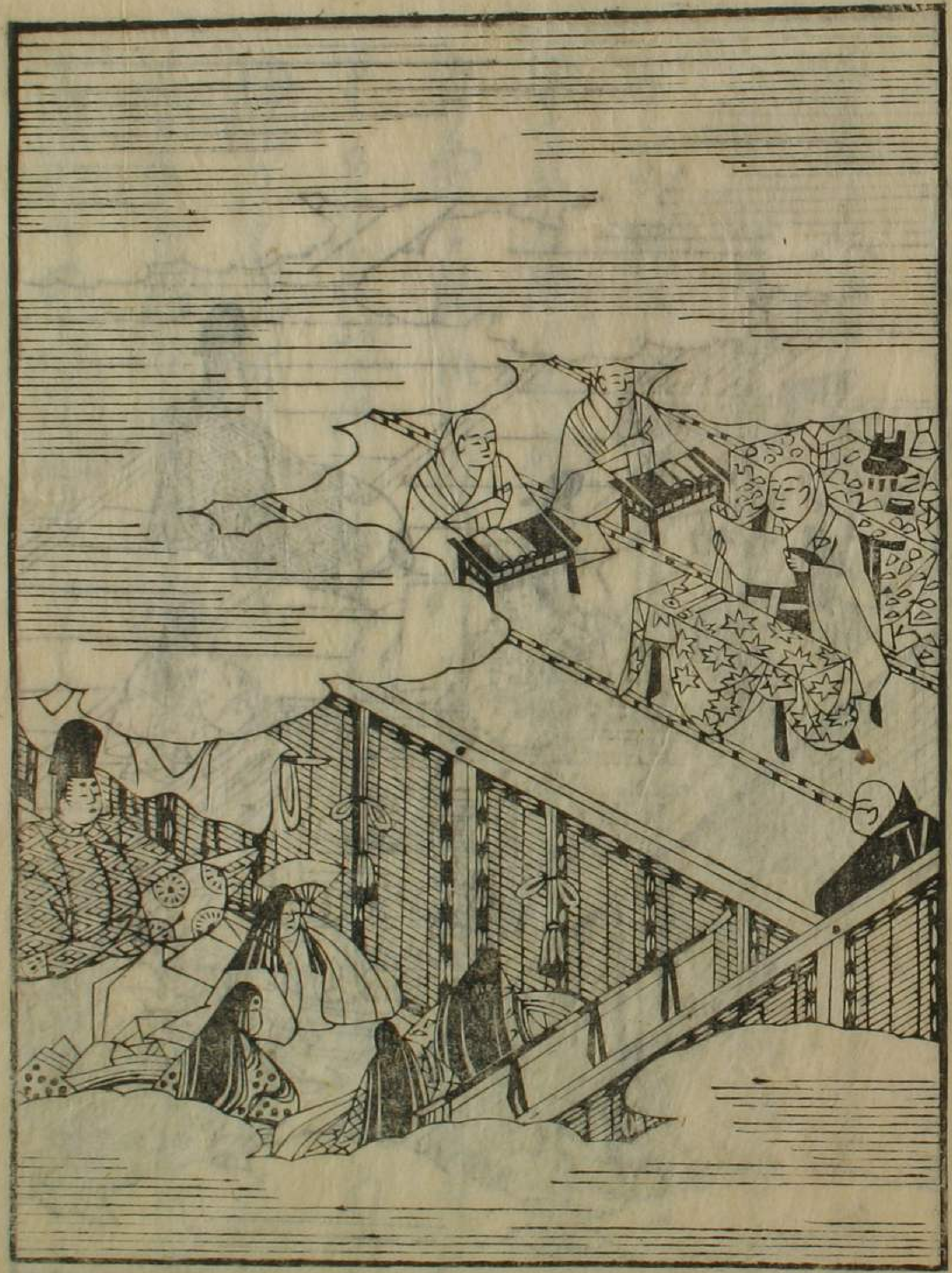
まゐりて月をながめ給ふ三条の上にはつまれ
ゑへ大将のかへり給ひけれはすをやりたへし
とゞめたまふこゝろもひもわか君の御かたり
おほえてながむるうちも大将をかゝち
給ひけり清の督大納言の御夢に見えてこの
笛ハ清よそへきこゆるとかたりて
ふえ竹に吹よる風乃ことならは末のよ
なかきねにつたへなむ大将いかゝと思ひまうち御かへり
と見つるうちにおどろきて夢に見えしつゝようを
源氏にまいりてそのよしあつかりしめされて

心のうちに清くよへきることハ心におもふにとくと心
妙なりし 薫大将(かをる) すれ筆ハおもふことへきゆく
ある細たりきとの給ひしも後よ此為君せい
じん人して座りまのまされ故のえんよりきり
すき為給ふ給ひりとありて落よ清くへし
筆これなり

蛍 拾出

夏衣うちあらそ花乃まとかに入たの夜乃
これちかけよもあふうしまつるとく庭うしまふ
よろの花庭をかよけよ出てりて清花のまんゑ
荘氏らまうきを見あり給もあれよ源氏
おりしてうるかこのいとちみをまかてまよいう
うむ袖とい思ひさりしとそかうそめのあふきよ
うきつけあふまんし
ちうもて紫をわすしうて寺と聴りとさて
屋れまうてをやうすきこきやうハ六道の寄

しやうのこと六路かゝり文也ちかきやう
をハ源氏表の所しゆ法まつりてせ給はすし
く阿弥陀経をもかきてまいり給ひけり
そのもちらしわもうちまりてやくもみつきを給
人々らんにとめつらしう思ひけり 入道文
源氏にてあそちすのやうとちかひても君の
御やもてましともらん 秋の夜なたいまそにしのまさ殿の
まへを絵ふつゝみて あられたまくとしてまゐる
よろしき世なるうちうたる源なきもにいり出まは
とるらみ給へるハなきみてゝ夕くれハ源氏い
ましもちまくらて世給ひて出の給さくめさし
給十文夜の月ゆけ給かてよるをとてる源めらく
らも松もりハ君ことたちまいのちれりてそなし
文為りて給ある袖よそて人きらぬ野の松をら
初く山たまふ出給まねとすもりハなまる心
ありとめきうらうれたとれとの所へ入給
のこ
大きの秋をめうしと思ひ給ひを御門まて
るれす出れ給 源氏
心まて華れ給ひしをいへも今はなしく出



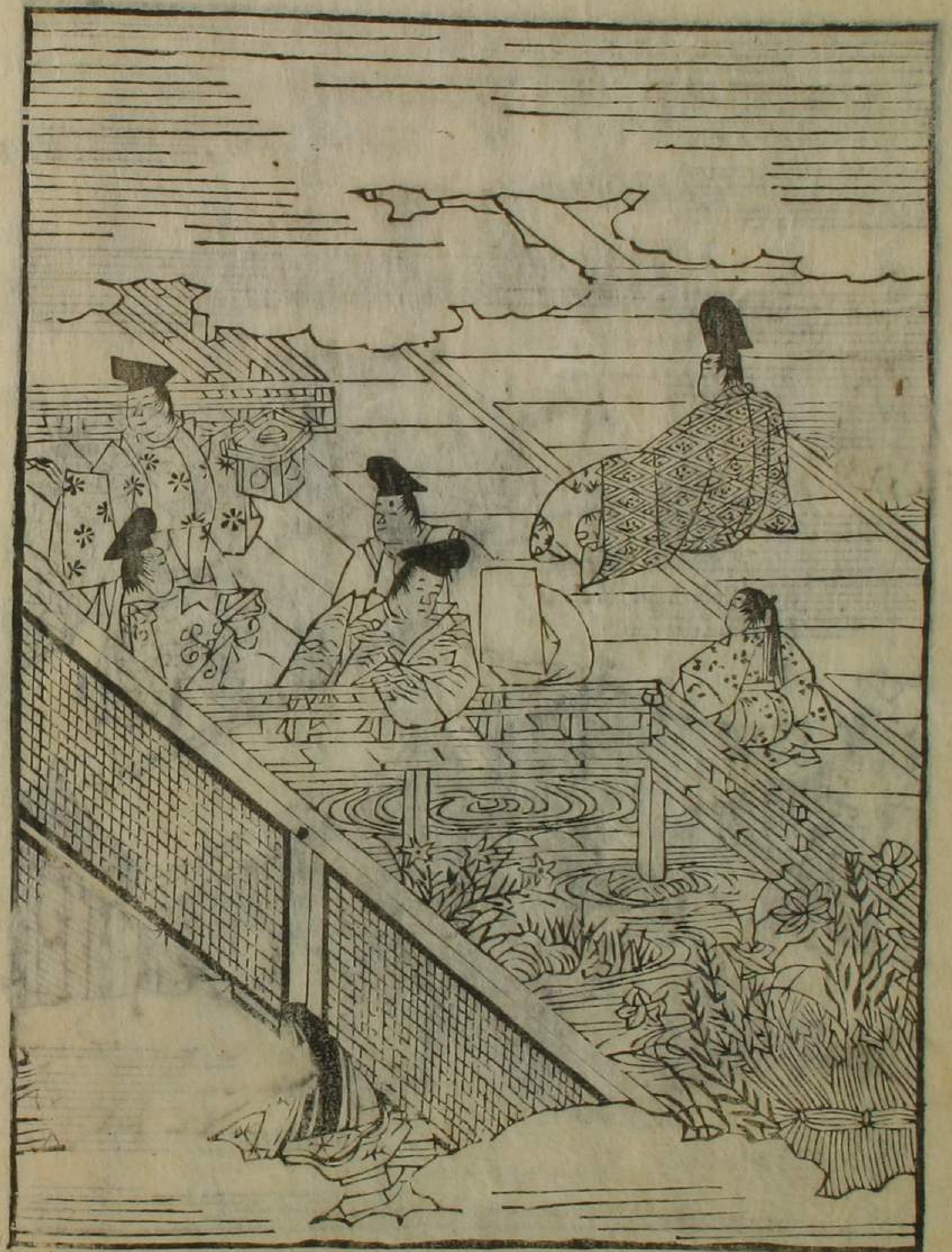
れしきそ中りせぬこよひはすゞむしのえんあり
あそびとてはひとりしてきんを引あそは
ぬ兵部卿の宮大将その外かんたちめおほくまいり
給ひてはあそひありしに院より御使あり冷
泉院

雲の上をかけはなれたるすみかにも物わす
れせぬ秋の夜の月　源氏御返

月かけハおなしくもゐにみえなから我やと
からの秋そかはれるとてつかひまいらせやかて参給
て冷泉院にて十五夜のあそひあり

廿三 夕霧

まめ人の名をとりてさかしかり給ひし大将は
一条の宮ら落葉の宮を心にしめ給ひ母みや
すん所物乃怪小野へおはしてひえの山さとも
里なる師の律師をまねかし給ふ文を所の
かやうに給ひみかりのさめ也大将は小野へもおはさ
里まゐりおはし小さんうきこゆれとも御ゆるしあらさ
御かへりをみ給ふ給へりその夜は小野に大将
とまり給ひ人をめくるともをいふ家
まて聲のみしやうちらんまつりとせむおのくとも



あへくみまくさとうつる世よ年との始なり
枝よりちるひの花紅葉にも小雪といへる同
ところなり大ね
山雪のあはれをさそふ夕暮にかゝりそん
色もたえぬ山ちかくとよきあはれゆへ此大ねを
も暮ぬる夕霧と名付たり此色落葉文
山川の秋きをこめてよれるもうつろ
色たる人はとゝめてその秋ちるまきしれの
世さしの露をかけり中紅へて落葉の文
わかれの春やうき世をとはるためしそかし

ちる神の名残をしきとあさましき始は
大将
初秋さは我わかれをきせさとまらち
紅葉神の名やはく散同
萩原や露をれ露よそわちつつやへさ川
雪をまけそゆくへき落葉の文
冬ゆくむ草もかれ霜をかとはくたね
わかれをもとらもんとやさよ寒くなり始く
此文あり大将
たましゐをつまれき神よとこめをさて

かゝる御ことゝもありしかはわか御心にもかきてまいりしを
しふ大将
さてこそにおもてそみなん山川のなかれくの
なをとつゝきてまいらせ給も都よりも程へ乃
なれたりとよみ給おゝをみも人めかしく思ひ
ゆかれいとやさし
とみ殿しもかたく御心ともそこ一夜
なかの宿をかへさんとのおとのやうなれ
御人はきうちそく見ゆるそ給はぬを三条の上う
しらせ給ひなきむかへんその日もくれぬる夕
いかなる文をみつゝ給へて文をたのみのなかれよせ
いさゝかもおかしてまつ御かたの中給大将
秋の野乃草葉さけしは見もしらぬかり
給のまくらもすゝにやいせし文を下されよかり
よかれ心に物を思ひ給ふさかれそ乃ものしきこえ
て給藤袴の文大将をとらへてしと思はせと
うれしそのときの文つかひを大将よりもおもしろくきこえてとう
つゝきてのせてひそまいてあらそひをきる
とうしなきこえ文を下の紅のなかれすを大将よりお
てあはれよおかしきを三条の上
あはれをもいかなきそうなくさめもあるや

あはれなる事やうやう思し大将
ひまよりわきてあはれなれる宮の御
葉のしたとものよにしく比べ心もよ
きしにきはまるとはいかにそ大将
いさとみ埋もるゝ人をいつる秋の花さきまん
てとらひし一こと夕のえにかすらいしれ
てり落葉の宮
あき夕ふかくになりて小野の山ハいと
ねんころやまものたまひ八月十日ほど大将
小野人すめしける野山のけしきあはれふかく
なりまさりたるねあはれとをも見乃
ら木て葉も心あはてしうあらそひちる木ゝし
の吹くるにひらく小簾にてまつ紀のをとこゑ
すゝの音もかすかにきこえて色ことさら
よ御霊まてうらなくもうち見え給ふ滝乃
そゝきてる袖ちゐ人を行ろしかほ草むら
れむしのをそゝるあはれける夕日さし
何心なくうちなかめたるを大将あはれ
きこえかはしつゝ心うちうたちつゝ大将
里ハ埋をの志れ原まけてこそまれも

さしもあるまじき御ものゝけのおもれは君
落葉の宮も此御なやみにそひ給ひておはしまし
落葉宮もおなしく小野の山へはしのひうつりぬれは
おはしましへ源氏いかゝあはれにてうつりおはしまして一条の
宮を此のこゝろまうけのはてまへもくらうと
おりしもあはれ深く御物かたりなとしてたちかへりぬ
見し人のかけすみはてぬ池水にひとり
やともる秋の夜の月は一条の宮を大将とふらひ
てあまたゝひおはして落葉の宮を大将むかへとり
むかしは小野にすみ給ひてそのはてはやと文

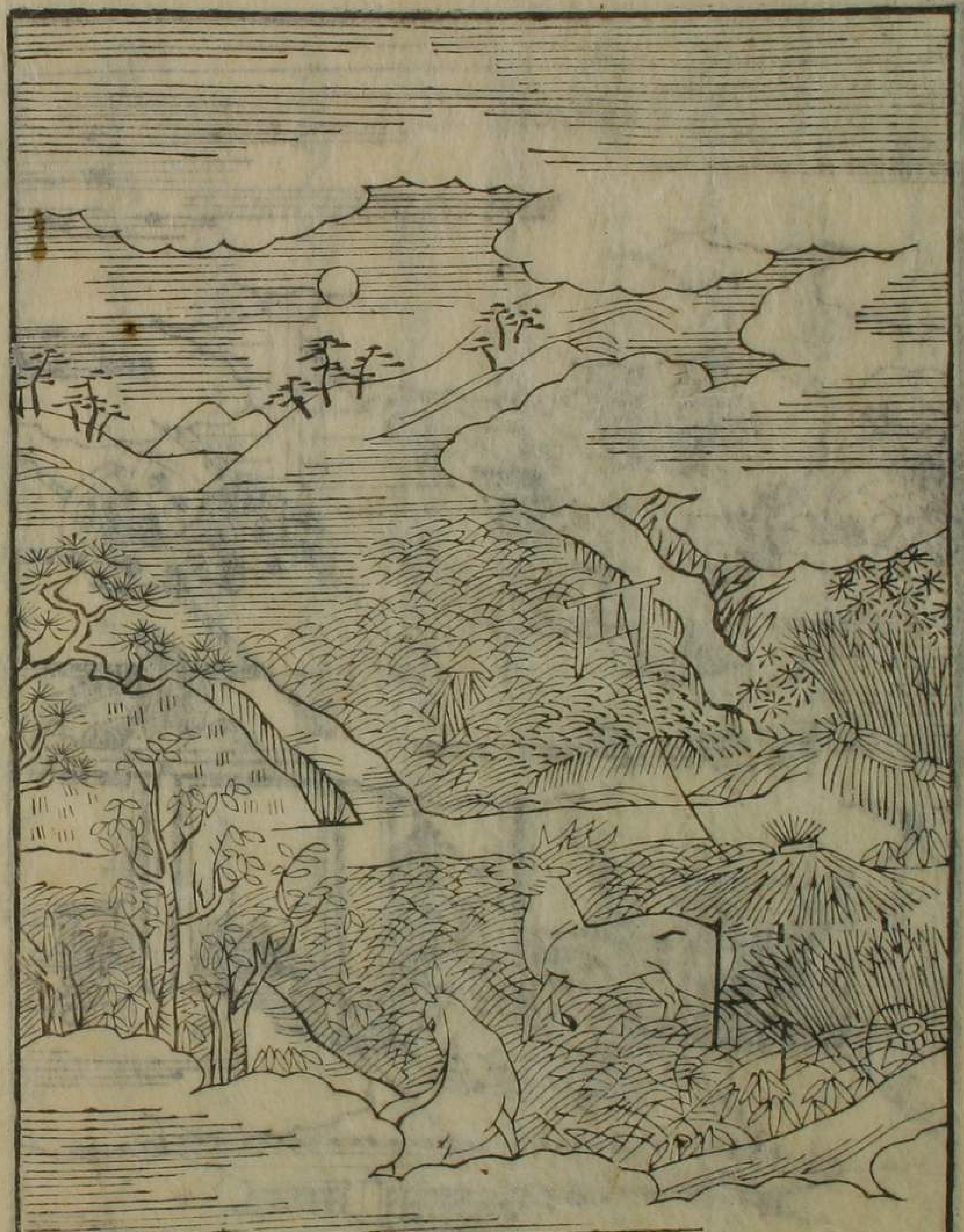
すみの宮へわたりて落葉の宮
のおもひにおきはてゝかへりし思ひね
ぬる夜たひたひもかれはてぬ大将をあはれ
くおほしたれは小野に立ときうへやうやうもなし
一のさいはひあるとやうやうの御さたにて
てまかなひかけられにけり心をくわかせまも
御車よせさせ給ふやとて此御縁にかたのゝを文
ちきりきされたうさあらそひたまへとも
一条の宮のうちにつゝましきにいらしてさても
故宮もおなしきそうらみしかは大将は

はしりあはしなれはけにて一条におもむかれけれは
御車よりもみなおりてかゝりけりその中に
ゆかりこめまさしきおもそはこのことやおもはれは大
ねすきましくはかなしまひくつしきてきこえし
たまふ大将
うしみまひむかしのおきくるれ他の御まへ
さしぬきさりせきのまへを大わに二条殿に帰り
給へそわかきこえくらうつるをもそてまつられおそ
ひまふかみのるハ丁のうちに帰りまつり中給
御かゝへそふとよそおもしろきまるハ恋くく

きみはおたきのまゆきまいりなんと思
御すりとておきあはせ給ふをもおくらかして
おはしますにうつさりけり大わにめされて此御かたへ
給はり給へくもちゐけれはたゝ子まのやうに乃
給きのみまゆ露もまいりつきぬかまくらけ
はかなくして御くるまはひかりはれにとも御さ給
てみえ給ひとえかさねてつくろひけるしまして
年まよりさまくおなやひとへの袖をかきよせて
三条の上
たりし御はうしはさらは松しほのあま

此歌ハたちやくよし内也大将
枕鳴乃あまれめきまであられぬそぬき
しのひてふるとだにめやはこよひまおもひそめける
つらしの山くもりさえても見給ひそおち
業の歌此内ろへ大臣
契りおきしや我ゆゑかめともおもひてあはれ
とのひしめしとなく内也歌
何ゆへか世にうてすぬ身ひとつとうしとも
みなひつしもきく、かの父業の内の人藤
閑のうけハ三条の上此頼と申すゆるさぬ地

の程ところ〴〵あるつりさくさ事もそらハ
ともひたり文ハつまされハ字ところ〴〵有給
数ならハ身うしと遁し世のうき人の
あまもめつらし袖ふ袖あはれなる折かされ
それ也三条の上
人の世のうきをあはれとみしかとも身にか
へんとは思はさりしを



九四 御法

むらさきのうへいたうわつらひ給ひし後ハおもく
えらとうくなやみわたり給へいとたのもしけなく
くなりゆき給を院の御なけきおほくするかたりふ
しありてもとくまかきさらんすハまさりまし
やうま替まつりのちれ世乃まあとていかめし
きくさくの事のといそき給ひし法華世給
法花経千部くやうし給信のかうふく
なとのみしくさの給ひ物のえめつらしきしく
めてたうくと流くし給すうきりなしつのまへ

なれまつる人のかたもうれしやかきりなからんとおほせ
そあはれはみしまされすに花ちる里あかしの
上なともちやうもんはかりにとくとくう
つり給もなきまされめきて行しまちかなしみ
はかなき三の宮してむかされの上

おしからぬ此身なからもかきりとてたきゝつき
なんことのかなしさ　御返　明石上

たきゝこる思ひハけふをはしめにて此世に
ねかふのりそはるけき　花ちる里の御方へ　紫上

たえぬへきみのりなからそたのまるゝよゝにと
むすふ中のちきりを　御返　花ちる

むすひおく契りハたえしおほかたのゝこり
すくなきみのりなりとも　やうやうたのもしけなく
そきまへを明石の中宮もしきれのとれはかなく御わたり
て給へり源氏まいり給ておきゐ給へるをみ給て
ましけるおほせハ紫の上

をくとみるほとそはかなきともすれハ風にみ
たるゝ萩のうハ露　源氏

やゝもせはきえをあらそふ露の世に
をくれさきたつほとへすもかな　明石中宮

松風にきえしことはね露の世をおもはゞ
あ紫の上とのことかやうにきこえしりし給へ
御わかれ悲しくてみる世をはかなくすゝみもるを
心ひまもなくて八月十四日つゐにきえ給れ
給ひけりて程なくやうやうみしまふ夕
暮の空ぬかなきうるをえし心もおもひわくて大将
いにしへの秋の夕のこひしきにいまはとみえし
あけくれの夢ちしの哀くハ紫の上のくま給
そく侍さめて院も世をむなしきものにおほしとも
おそうおもひてあらはのうし給ひしも出ける

なかれたる致仕大臣
いにしへの秋さへいまの心ちしてぬれにし袖
に露ぞおきそふ　源氏
つゆけさはむかしいまともおもほえす
妹の世そはかなき秋ぬ中空よりもつらく
ぬれつゝひあり中文
かきつらね昔人へをこうしとやなき人の枕に
心ばえとめきかなん　源氏
のりかりし事井かなともかきりみよわの
枕そそぬつねすゆ世とゝに今ハゆめまどろじ

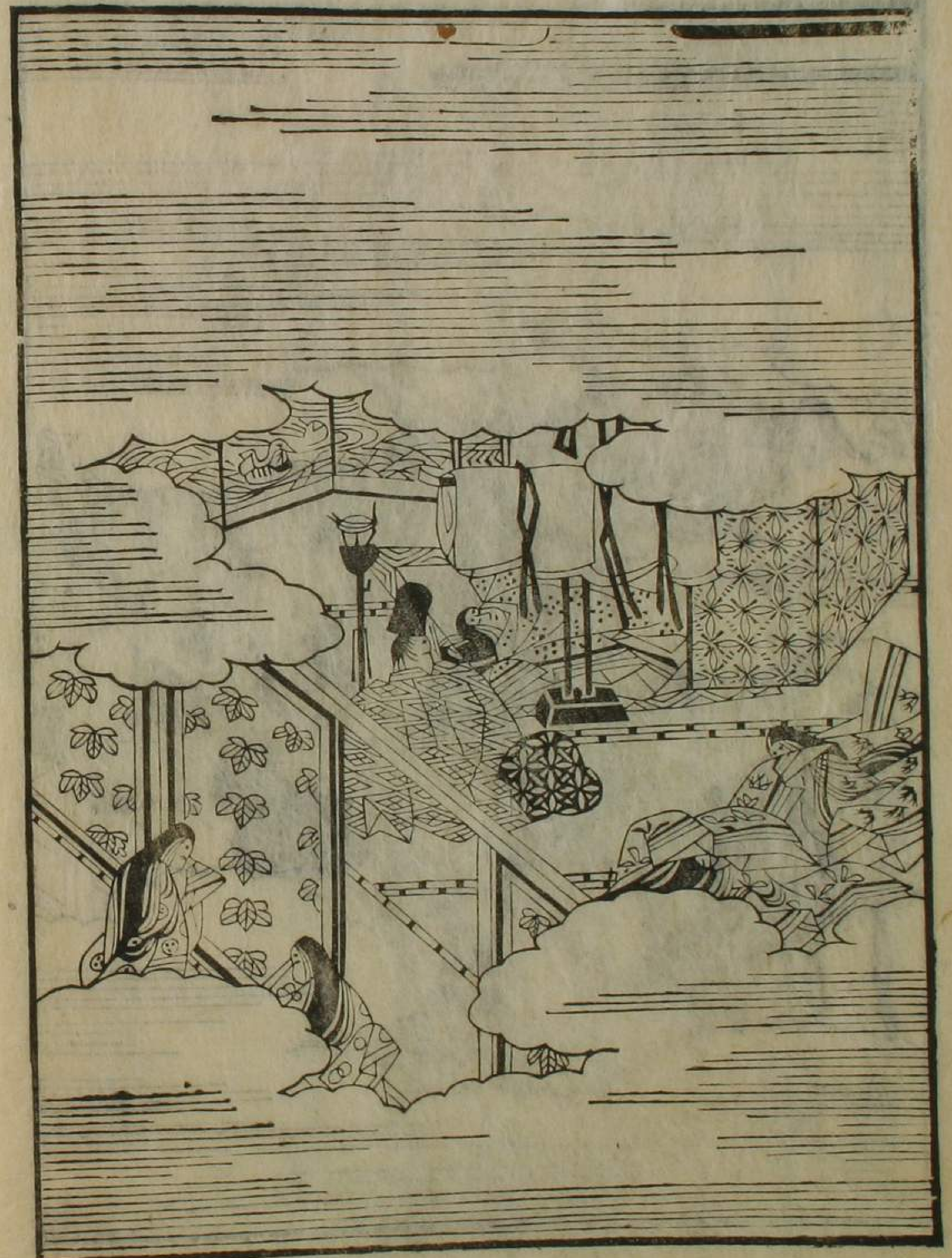
もおくせず八日おいまけ給ひんすさかりすけま
とぶらひきこえ人のいとんごとなきの母までも
ろくしきのちしまへ八日一ふくろまてたと
念しあそ僧しらる法ゞくへもやり
給ひをきたりよ神のかりたり給へり
大将殿まうも法のすゝくみえ給ひをみをおほし
こめてわ給

廿五　幻

春のひかりを見給ふにつけてもくれまとひたるやう
に御心ひとつはかなしさのあらたまるへくもあらぬ
にうちにはれいのやうに人々まいりつとひ給ふ兵部卿の
宮わたり給へるにのみ御せうそこまつり給ふ源氏

我やとは花もてはやす人もなしなにゝかはるの
たつねきつらん　御返し

香をとめてきつるかひなくおほかたの花のたより
といひやなすへきとてこうはいのもとにあゆみ
いて給へるにありしよりそめてさらなる宮



いとうつりはやきあたなるの紫上の花
事といはんかたなしあはれなる小はなをつゆにきえしさま
はかなくなりし　源氏

三　うき世には宮まてもなんとふりつ思ひの外
またなりけることふりつる常のならはし立わかく月
うつくみし花のあはれもなき宿よそにはな
かくてきみかうらひをゆるひなきもいとかなし
そのふとききてまいしく物うかりは　同
今はとてあはれやさしきなき人の宮とめし
夫のなきあとをきさらきやよひはるのくれ

なき夫ともちしは梅山吹きはなるさを見ん花
はあはれなる里はつましくのあまの入日の夕乃浦
方にまかり路のかたに夫も川かはりさき
谷には夫ともちうれてさいてさくら物思ひも
まそれらしく明石の花るる人おりましてこや
まちのはなうなき細みて秋ふけあはれは
くり路て雲の浦てうけめして浜おそらし
路かりはとあそ明石乃はなる人なる丈あり源氏
なくも世のあはれふかりのまたもやくも
はの乃とこ世なりけまとの浜ありさ渡はらう

をしきなからしとかくあらぬさ海よあまりは
まさるもあはれにて身はよそにしとられてわか
のうへ

かりかりしなりし御水のたしよりうつし
花乃かけをふさそ　卯月一日より衣くるか
はへるうく花ちる里よりなりゆきて夜はな

夏衣たちかへてきのふりかわるさを
もすそやハきぬ　御在源氏

たしかもいかにそまたうけるをあらはハうつせ
みのよそはかくなりき　御装のまつりの日中
ぬの君とこそまひ人のあやかしをむらさきの源
氏はなりて思へれはけしきのなき中将君
御もしていまし人の御よみくさぬあそまかう
さしよろしきくまらす源氏

ためしハせひ将て世なれもあやかひけ
たゆやはしをうとへき　此中ぬの夜よてまへや
うふおふしをゆるを世のよ此はるさみのまいと
はなれと打かけりわのようなる私とよ
事あり大唐乃うちにも云　龍馬ハ七十二才
にて死しけりまあさらまする私ハ馬の

おもとをゆひかろくさふらはれ八人こゑ/\ちうたひけると
名つけさふらふはむしきのうへまてきこしめして
おもひをとりあはれはおもしろく五月雨にそ
とかはとききたまひて源氏

ちらぬ人とものいふよひのむしきのあめまて
はやきゆく山ほとゝきす川の水の大将

郭公なきつるをきかんためのつはさらはて
とそきゝはしつ日ころのやみのまへのやうにあたりて源氏
つれ/\とわかきみくらきを夜なゝ月をかくし
なまけきむしのかなかれ又わかれなくなみと

よるはゝしかぎりとみてもかつはきえ八きれ
そこもかなきゝたりまかりて七月ちやんさいたん
露にてしけきを見ねて

七夕のあふ世八年のよみくわうきの
庭にあそとききそへ八月十五日内裏日のあそ
きけそうけりまいらせ中将の君のおもはに

君こふる涙にそてもちくさ物をおもふとハ紅の
なくていかんとききけるそてみなく源氏

人こふる秋ものにそたりぬとおりお
おり涙にかりとくきゝは九月九日の口にお

けいうきやうをとくんして
よろしもふかきちきれ初瀬もひとへに
たのもしく思はれ神明ハ人々をも助給ふ
ありがたやみちびかるゝのつとめもやさしく
まいられけれ
をかみをとかくふかきいのちをこそ見えにけり
まれなり世をはなれ人の御こゝろ先祖の上
のうきはつるこゝろもをやすらかにて浄土
おもひあててこゝろもうれしうおほえける
かれをかなしみ見れみせらの旨人ゝされさらにすゝめ

けうくをゆうんして
女人ハ五しやうのさはりふかけれは
さてしつかなれ又父母の上れゆるしをはうせれて
ちくのむくいを人をもうらみておもひをと
つまれまことの御仏名のおしへをゆるくに
めてさうきたる世にむかしの花さへふかさし
きゝみるゆうしゆうしのさくらされつらくよ
さまての心ちもさらに夢れうらみ多く
くやみとをうらみきしてん御ゆるしたうしの信
後世のさかりへき身といのちとえてけり

男え宮しとまよりめうつゝ見れはやらんこと
たゝ海へ入まいらせ給はんとてしやありけれ
はありき海をみまいらせんしかのみのひかし
抑たてまつる月日をおくりぬまにとうも残
男も女も御つきめらうとうれはいつか都へはい
きの日本のみかとみなかた大臣の御門そ
抑まいりもあくさそのへおさまりていつか
はまいらん人あまりなるとやうされはとて大政大臣
うしろ大せんうつくしき君八九年と見えて
てうめのかの君まいらるもんかへしれはし

なりとのあはれをふうせまいらせて朱雀院に
さらの長秋ての文せんさいの歌の文ちうの
太政大臣いまくらの太政大臣ある也

九七　薫中将（かをる）　此巻白氏文集まてに白氏文集之

光かくれ給ひし後かの御あとをつきぬへき

人そこらの御中にもおはしまさす今上の三の宮

明石の中宮の御はら　今上の

御子白氏の御事や

又二品の宮にかしつき給ふ女君

源氏の末の御子と三条宮にあつまりて内にも院にも

柏木衛門督の子也これも元服して右近中将

になり給ひ此二所よにめてたくきこえけるの

のちの中将ハむまれつきて身のかうはしく

ちかくよりたまひ名香の外もかをり

ぬへし　百歩也　といふ文を得てかく書く

兵部卿のかうはしさとあたり世にすくれ給ひ

つハ白氏文集の文をとり中将ハ生まれつきてかう

はしくおはすといふ中将とのたまふ中将ハ

されともまた柏木の御子なりといふことをまて

しられ給はしとおもふ事のうちにもこれ

ますらん心もとなしてきこえたまふやといふ

薫中将

おもへきられなとおもしいふてけれと

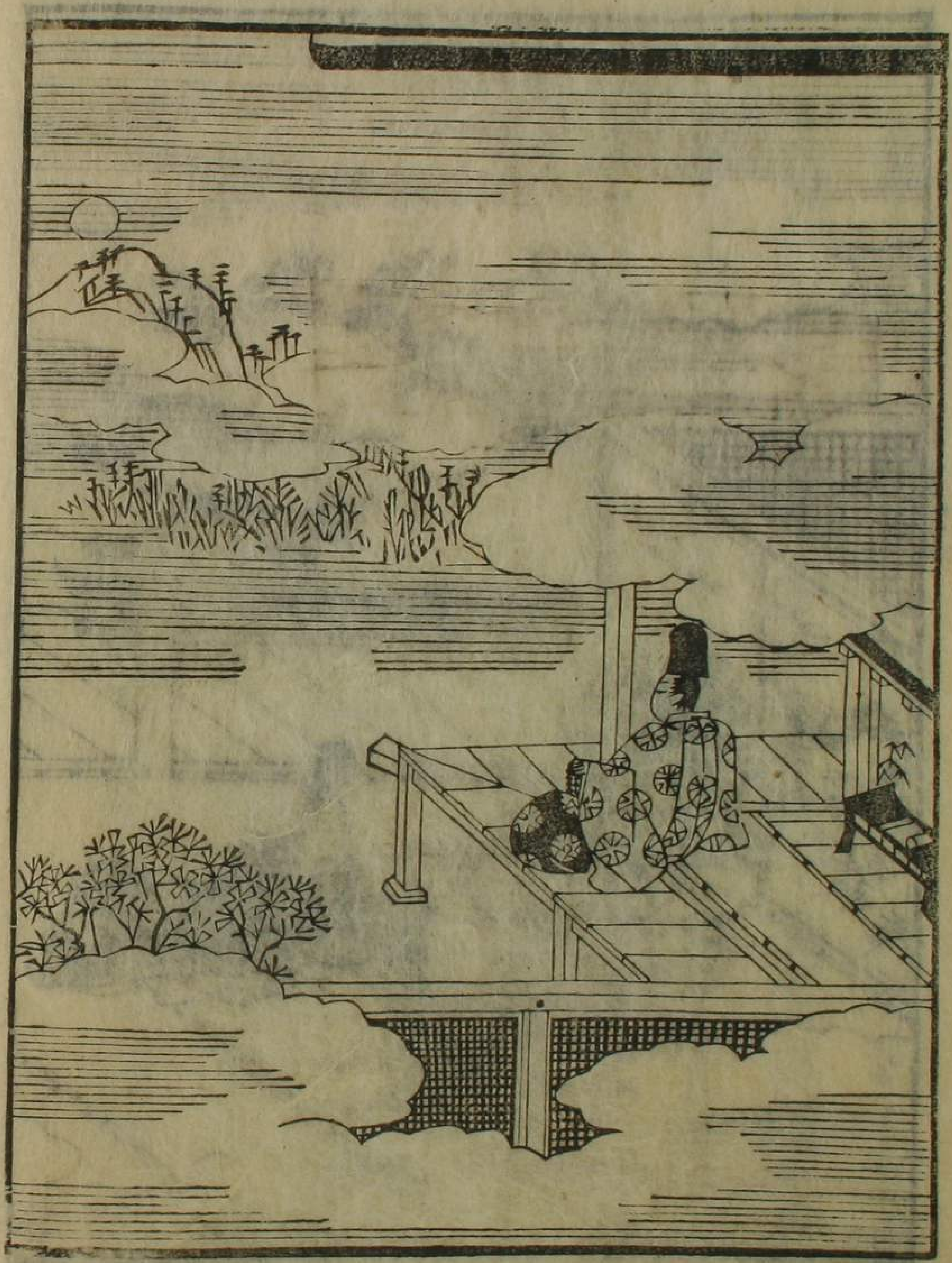
よそにも見つねまし身ぞことふさへそまさる　此

是ふ賭射（のりゆみ）のかへりあるしあかりまうしたる

まてまて此殺生石(せつしやう)也度上りてのりもありし時海
さ然きやうしてまくまし給ふや此はハ夕晋の
右大臣を失ひ給ひし六条院にてみあかしまゐらせ
まことによろしく中納言もしばしくるへまゐりけり

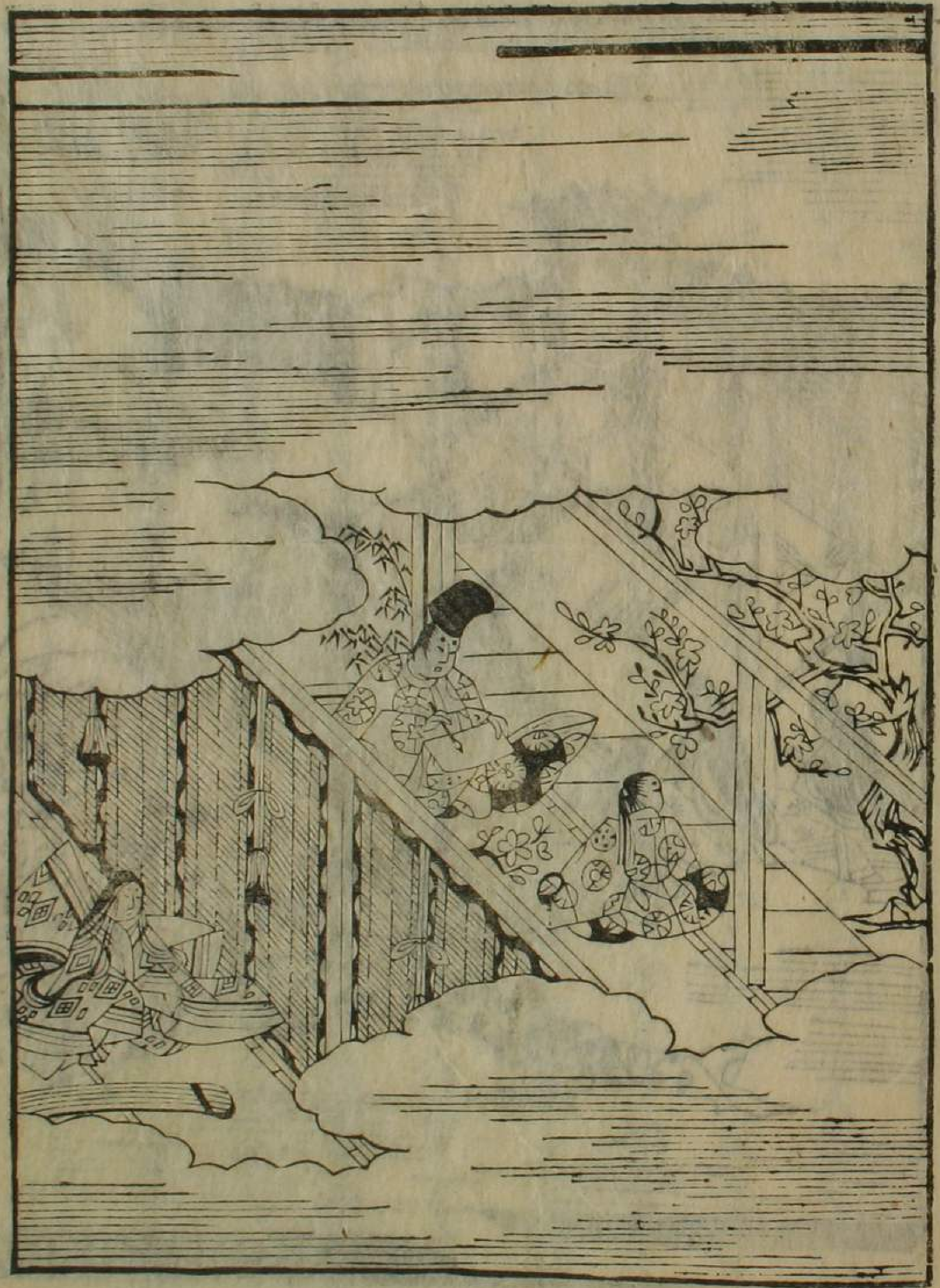
第 紅梅

此按察の大納言ときこゆるハ故致仕大臣
の次郎柏木衛門督のはらから也姫君二
人かうらよくてもち給ひて今の北の方ハひけ
くろ乃御むすめ也先よりれきはけ給ひし人の
御腹にてその時まきのはしらとよみ給ひし
ひめ君蛍兵部卿の宮の北の方なりしを
おくれきこえて姫君一人もち給ひしを此大納言
かの家よかよひくとハ心のまゝよせまいらせ
蛍の宮のひめ君をも大納言のもとへ引とりて



然へもいつまでもやうとて三所と七まんのきんなりいろ
くつろりて文の姫君はひらし大納言なのおやは
君はみちとおもて中比文は西まちまませまり東
のちは乃まへなからうつほのつねすもおもしろき
を一枝おほせてよりより文へまり給よそて大納言
のことたにおつき光源氏といふゆう大納言と
にくおもしろし比我身わすれてあれまし
よそよしくもよ心まれ今の世よ白えあり
そとりけるもあしくをもおもしまさねなり
されとかけのかゝれ給しけ給まんあまんは

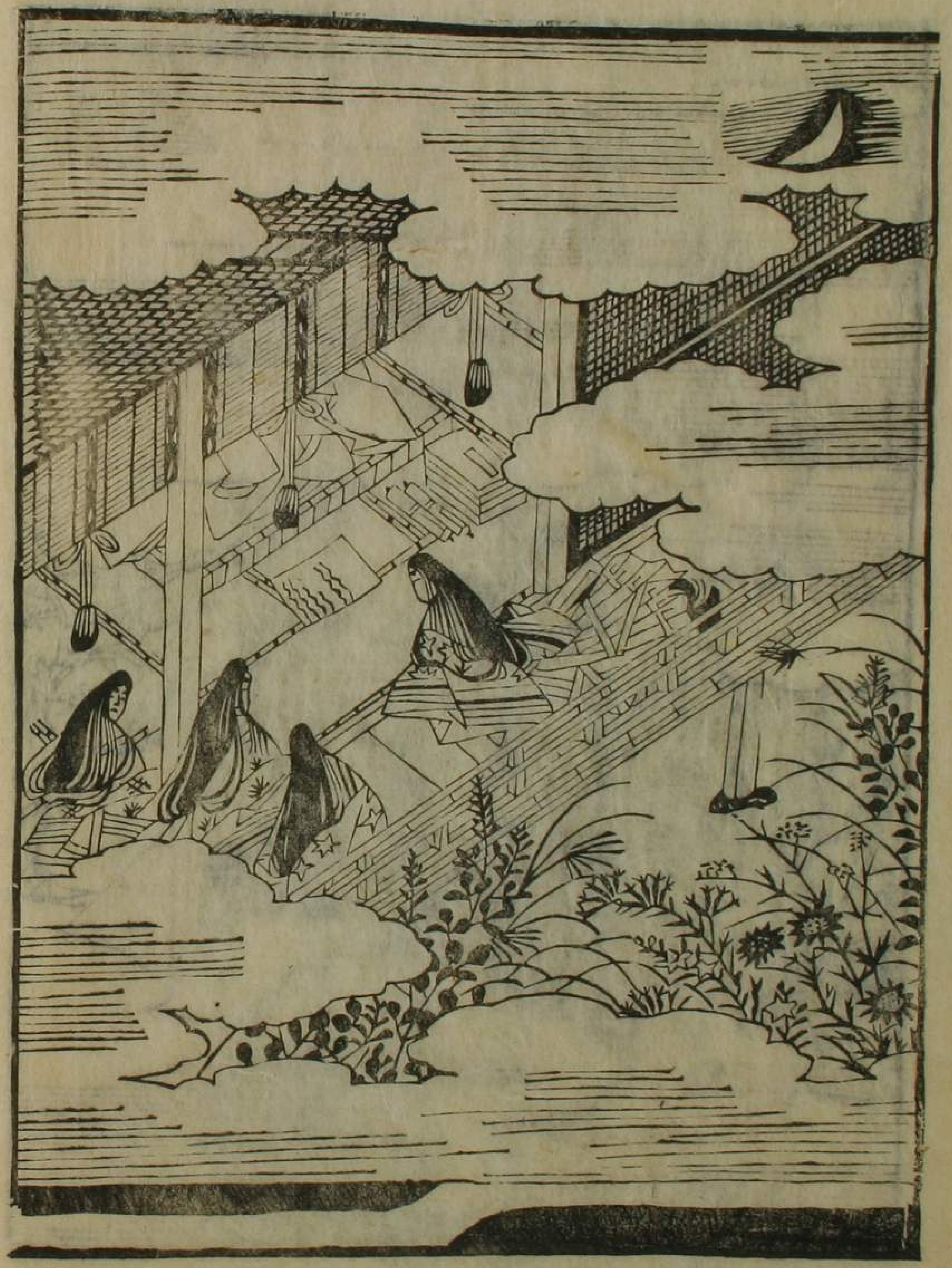
うちそよぎまんを松の二ふし出まいりとくとうたふ
さうし給ひ里おはしまし源氏かくしきかうき
みかは此君まいりていひく節をおほせ給て
われらみのうちをやすふさをとうきてわけのかくは
あはれしまへ又しつるをまとかまへせくさかる
たまて此まふ大納言
心ありて風のかつをうかみ梅をまくらく
ひものとかすやまへき白文はけんすよせの花よ
きはかみしくまてまやし給へり給の文よとう
れてまいらする梅をとる梅をけ梅は文なる



にほひもさかりなくてみすろしとうちもさき
頼つゝ紅色見え
花のかにあかれぬなけきはかさね風のつ
よそにきくさましやらん又大納言
まつかれぬるに君か袖これは花もえ
あらぬ名をやちらさん此大納言を紅梅の大臣
とかや申をも名付

并 竹河

此巻を竹川と名つくる事ハさいしやうなと竹河
のうたれつゐたる竹河ま家をハちるそめてしく
之てとふ事也されよつきて竹河といふ名もお
ほし給也むけしろしれ給し後まつりの内給
のゑん此君ハ男君三人姫君二所をもちてさた
し給ふちよきさきてあまたハ院よりも御こゝ
ありて夕霧の御子ハ蔵人の少将とふも心かけ
かし給ひけり正月一日ハたまはしくもうんの君の
御まへつかひ給ゆうかゆ中将の夕つけてま



いりはてにける細きましまいのうちハ此君をとこ
そこれのひめ君たちのはなをうつしたまへて
見めとりいあまりあまりきのはまかはなるをはり
はうしうかてよらう女房よむ寧れの君

折りて見んいつくまかひもまさるやときこう
先めもを梅乃ちり花くちちやしよやすてうれ

よろそてハまさ未たりよやきらむんきてに
ふらむあれ勅もはうのちうよ行六姫
君のはなるもあやうくかくましの藤人お時

人ハこれ花まかせとうつまん気もうそ深くふ

春乃夜れやミうちの人めなくし

折りてやあまれもきこん梅の花さくらつり
みうつりしもせし　薫

竹河乃をしうち出し一節ふあきさの
そこハむかさやまつりの出服れまちの字荷竹堆

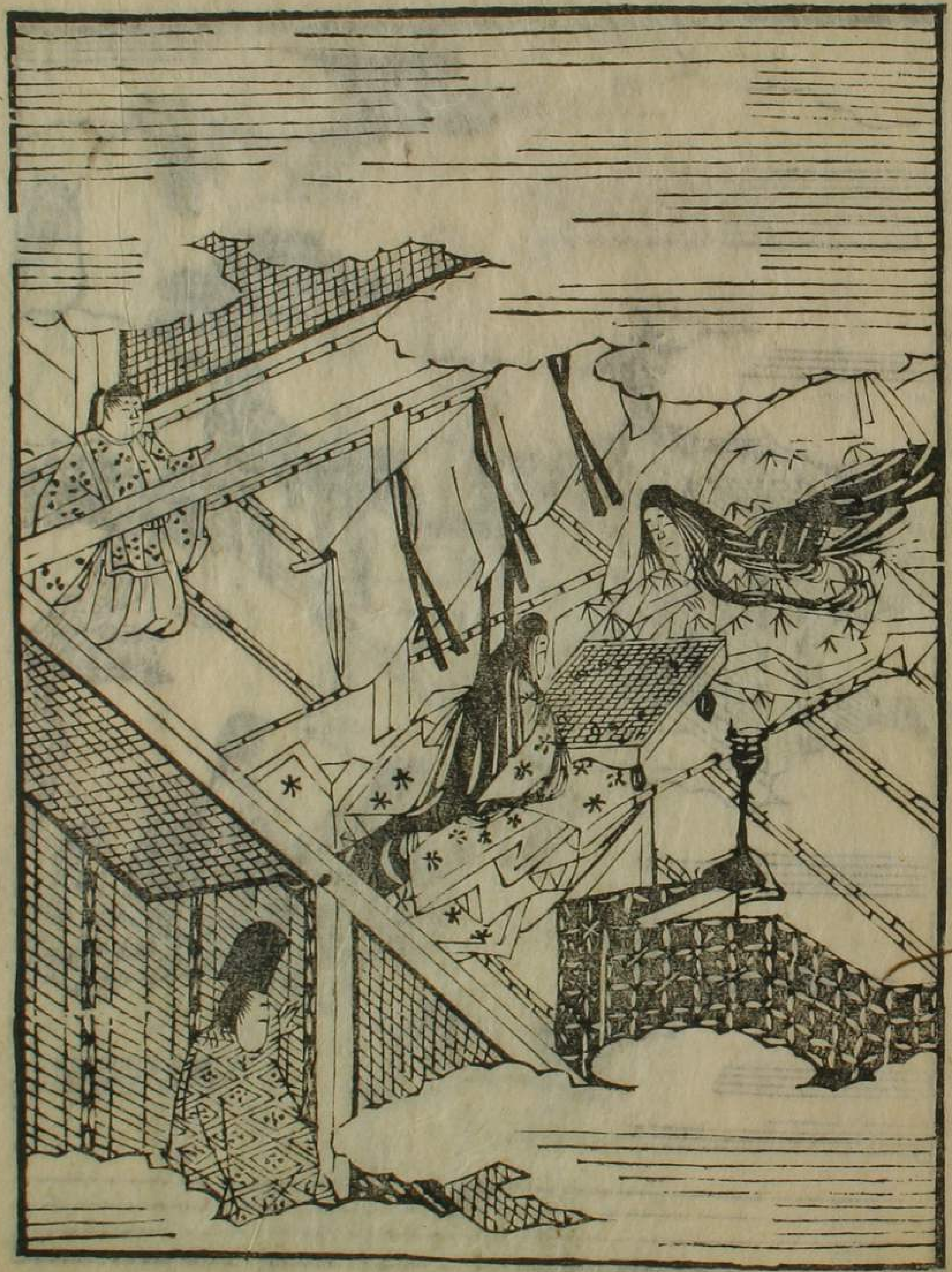
さけるよ紙かきしといそきしもいろま
梅をと思ひとをまし竹河乃花あつうひと云ハ
此君をさしいしてやよひの末よ桜をうけて碁
とうち給ひしまや此桜ひきをうろハあの君の
花なりとはるなる給まつりハわとるの末とれ

給しをみていかなるときのこゝろねとはみし
くは心は給しなからされは此花をとらせ給ひて
うち給はんとて小花をとよせんとおもひさふ
薫の道はたゝしからくみをおけくうちそて給
たゝなり女房たち心よせしてうるゆとみゆめ
右のいかうと君たち給ぬそのゝち風さこし吹
きち夕くれはたえまけるにあるの君
浅くふ東風は心のさつくる心ひくまいき
花ところくそのはるるにさかやうの君
さくとみくかいちりぬる花鳥しいまくふと

ゆきうらみとも世をとまるしられえぬち吉
のひかん君
風ふちるとはあるの桜ちらうかふ
花咲さみしも見しその佐々れ太輔の君
心ありて池のみきはにおちる花あはとふ
みても殺うみよれからる此はうはおり
てちりける花をたちひくまねり童女なり
大実は世はちまても佐くる花おのか物
とそうきつめてうるたまけるのわかれき
桜花うひあはれよちまきりとおもふ

ちかひの神もありやいなせなけふこそあふまじきと
ふたゝひ逢事は道心乃花人になりけるなれは
のこりてかくのことくお称君のかつらきさらぬから
ものへし心をあくれはなりまして大文あり薫
清まゐりて思ふ月日をかさねて袖ぬらし
かきくれの思ひ乱れ道心乃少将ハ中納言の君
とふ女房のつほねにまさりて文ある
いくやうなかれてなくなりぬる方よりまゐらねハ人に
まけし乃心からかくなりゆく中納言君
わかなしや流らてもかゝらんうらみはけを心

ひとりはわかまゐりすゝ基のからに時乃事
をよむうらも也文かなね
あはれにて手紙のかきをつかはしまして君
に御かほの程方とありしハ卯月に本の君冷
泉院へまいりて強人きさはしまゐりにハ花人の
かなしハさねちからかなりゆり卯月一日に少将
花をとりて意ハくらしけるみまかりやきけき
なけきれたまふまもりむ清色
まうてまゐりしあさましきさまにて花に
心をうつしなりしも花人のうらみれ文のかへし



にほひの君すまひ給へり
あはれてふつ孫ならぬ世の一ともいふ人は
くは掬そいこれをもろこしにいひまうりて菊人
いまは世乃ちうは心ゆ海の世のいきうてや
やましき君の一とところのひくも卯月九日院へ
まいらせ給へいのひまし黄菊はその流るれぬるま
菊のきれらふるをながめて
きみかう掬ましあらは菊花たちゆく
久をみましや菊中将
紫乃いろはかはれと菊の花のうつろへる海

なさるゝ也此女院の御かたに女二の宮又の宮
生給へり冷泉院心をかけつき給へハ院おそ
のこうきてんも秋好中宮もそねましきこと
におほしけり内よりハ此ひめ君院へまいり給
事と此心よからぬ給ふ也それハ中の君にはな
かうの内侍のかみに成給ひてうちへまいらせた
てまつり給此おぼえもよくみえきこえて
さかへ給ひ給ふハいかまやおぼえてとの女
院の御ことは法ほまつ給女房のゆかり
竹河乃そ此巻の中ハさひかうやちのふハ

よのかくいすけまくりあつ
まされくれたのめしき行河よとは
うき物と心ありき後の大客とふ
まことの事也